

第1章 指導の礎としての「関係性」

1 関係性の基礎―子どもの好嫌感情

児童生徒の学校生活は、当然のことながら、担任の先生に寄り添い、寄り掛かりつつ、進んでいきます。ですから、子どもたちにとつて、どのような先生が担任になるかは、私たちが大人が想像する以上に、大きく重い事柄です。にもかかわらず、このことをそれほどには受け止めていない先生もけっこう少なくはありません。

「今度の担任は 先生だつて、嫌だなあ」

「よかったあ！ おれたちの組は。先生だ」

「いいなあ、きみたちのクラスは」

これは、新学年になって担任の先生の名前が発表されたときに交わされる、子どもたちの悲喜こもこものあいさつですが、担任替えは恒例だし、子どもたちの一喜一憂には慣れっこ

になっているということ、

「好き嫌いなんで、単に人間の好みの問題にすぎないよ」

「子どもたちのそんな気持ちにつきあっていたのでは、教師稼業やってられないよ」

と、軽く受け流してしまう先生がいます。面白いことに、ベテランの先生ほど、そうした傾向が強いように思われます。これは一体、どうしたことなのでしょう。子どもたちにとって悲喜こもこもに大きな出来事なら、その子どもたちの面倒を見る先生方にとっては、もっと重大な出来事として受け止められるべきはずの事柄なのではないでしょうか。そして実際、それはほんとうに重大な意味を持つ大きな問題なのです。

考えてみましょう。私たちが人を好きだと言い、あるいは嫌いだと言うとき、それは単に、相手の性格や行動、あるいは容姿や肉体的な特徴など、些末な、部分的なことについて感情的な好き嫌いをしているのではなく、もちろんそうしたことが含まれていることも事実ですが、もっと人間にとって本質的な特性、すなわち、能力とか、価値観とか、さらに人間に対する姿勢とか人生観とか、このようなものを丸ごと含んだ人となりについて、言い換えれば、その人の全人格についての総合的な評価をしているのです。そして、好きな人には信頼をよせ、嫌いな人には不信の念を抱いたりします。

子どもたちにもまったく同様に、というよりそれ以上に、こうした傾向が強く見られます。子どもが

「先生、大好き」

「先生、大嫌い」

と言うとき、好き―嫌いと言う言葉に万感の思いをこめて、さまざまな次元から、

“よい先生、悪い先生”

“できる先生、できない先生”

“立派な先生、下劣な先生”

といった評価を下し、そしてここが一番大切なところだと思つのですが、最終的には、

“信頼できる先生、信頼できない先生”

というレッテルを張っているのです。

師弟関係に限らず、親子関係、友人関係、上役下役関係など、どのような関係であれ、人間だれしも、好意を持っている人の意見や命令には従おうとしますが、嫌悪を感じている人のそれには、素直には従いたくはないものです。もうお分かりのように、教師に対する好き嫌いの感情は、単に人の好き嫌いの問題にとどまらない、深い意味合いを持っています。この好き嫌いの感情が、教師と児童生徒の人間関係、すなわち指導関係を大きく左右することは間違いありません。それにもかかわらず、多くの先生方は、子どもたちが抱く教師への感情をそれほど重大なこととはとらえていないのではないのでしょうか。

冒頭から、とくに子どもたちからあまり好かれていないと思つていない先生方にとっては、

嫌な話をしてしまったことに恐縮ですが、しかし教師の指導力について考えるとき、子どもたちの教師への気持ちをぬきにすることは、けっしてできません。

例えば、

「やさしくていいなあ、この先生」

「先生と一緒にだと本当に楽しいなあ」

と思う先生の言うことなら、

「おまえ、そんなことができないのか、校庭三回まわってこい」

などと、たとえ権力的な内容で無理のあることでも、子どもはそれに従おうとするでしょうし、また、上手とは言えない授業であっても、静かに、そして熱心に聞き入るでしょう。

その反対に、

「叱つてばかり、嫌だなあ、この先生」

「先生と一緒にいるだけで気分が悪くなる」

と思う先生の言うことだと、たとえ筋の通った小言や命令であっても、なかなか素直には受け入れられないでしょうし、少しは上手と言える授業をしても、子どもたちはそれをつまらなと感じて、騒いだり、うわの空で聞くということにもなるでしょう。

もちろん、権力的な態度が嫌われ下手な授業が聞かれない、友好的な態度が好まれ上手な授業が聞かれるというのが厳然とした事実です。しかし、それまでの積み重ねによって、ひ

とたび好かれ、あるいは嫌われると、日頃とは異なる態度や状況があっても、今述べたような、一見矛盾したことが何の不思議もなく起きるのです。実はこれは、特別に不思議なことでもなんでもなく、人間の感情の機微、というより、心理学的に言えば、行動の動因としての感情・情緒の持つ意味と重みを表わしているに過ぎないのですが……。

このように、教師に対する好き―嫌いの感情、もつと言えば教師を全人格として受け入れているか否かのポジティブ（肯定的）―ネガティブ（否定的）の感情は、教師―児童生徒の指導関係の礎となって、よくも悪くもそれを決定的に方向づけています。

2 生徒指導関係とカウンセリング関係

教育・指導は、もちろん、その技術によって効果が左右されます。しかし、その技術も、今述べてきたように、日頃から教師に寄せられている子どもたちの感情や評価の度合によって大きな影響を受けます。これは、学校教育の中心である教科指導や生活指導はもちろん、どのような領域の指導においてもまったく同様に言えることです。このことについて、もう少し考えてみましょう。

クラスのある子どもに何か問題が生じたとき、それが学業の問題であれ、非行の問題であれ、一般的に言うならば、どの先生が担当しても大体同じことをやるはずで、一つは子ど

もに対する直接的な働きかけ、もう一つは家庭に対する間接的な働きかけです。そして、子どもに対しては“問題”と密接に関連していると思われる学業上の問題、交友関係、生活態度の乱れなどの改善をはかるため、また親に対しては指導のあり方についての反省や家庭内の人間関係についての調整を求めて、それぞれ面接・相談することになります。

このように、行うことは同じですが、その結果（効果）となると、かなり大きな違い（個人差）が出てきます。A先生の場合は大体いつもよい結果が得られるのに対して、B先生の場合は大体いつも悪い結果しか得られない、といったように。このようなとき、一般には、A先生の方がB先生よりも面接技術や相談技術が優れていると考えられることが多いように思われます。

たしかに、面接・相談の技術（カウンセリング的技術）は、生徒指導を行うにあたって、基礎的で重要な技術ではありません。しかし、こと学校における面接・相談では、それよりむしろ重要なものは、技術以前に存在している教師と児童生徒（親）との関係のあり方ではないでしょうか。それに、生徒指導とか学校相談は、いわゆるカウンセリングや心理療法とは必ずしも同じではありません。というよりも、カウンセリングや心理療法のさまざまな技法や方法を含みつつ、教師―児童生徒（親）という独特な関係に基づいて独自の方法論で行われるものですが、このことは、カウンセリングや心理療法などの心理臨床活動におけるカウンセラー―クライアント（患者）関係（カウンセリング関係）と生徒指導や学校相談にお

ける教師―児童生徒関係（生徒指導関係）の「関係基盤」が根本的に異なるものであることを見てみれば、すぐに理解されると思います。

例えば、カウンセリング関係は、悩みを持ったクライアントが自ら援助を求めてくることによって始まり、またクライアントの意志でいつでも中止することができるといふ任意的な関係ですが（任意性）、一方、生徒指導関係は、児童生徒が悩みを持っていくか否かにはかわりなく、学校・教師側の意志によって（否応なく）始められ、児童生徒の意志によって中止することはできないという強制的な関係です（強制性）。このことは、大変重大な意味を持っています。すなわち、カウンセリングにおける対象者（クライアント）がカウンセリング関係に対して積極的な意志を持っているのに比べ、生徒指導における対象者（児童生徒）は、生徒指導関係に対して消極的な意志（多くは否定的・拒否的意志）しか持っていないことと、敷衍すれば、同じように改善すべきところがあるにせよ、両者は異なる方法でアプローチされ、関係をつくり上げていかなければならない、まったく異質の対象者であることを示しています。

このほか、カウンセリング関係と生徒指導関係の間には、

非権力性（平等性）と権力性（非平等性）

カウンセラーとクライアントの間には上―下、主―従、管理―被管理といったような一方に力が偏るような関係はないが（非権力性）、教師と児童生徒の間は明らかに上―

下、主―従、管理―被管理の関係がある（権力性）。

非審判性と審判性

カウンセリング関係では、特定の規範によってクライアントの欲求・感情・行動が批判されたり、糾弾されたりすることはないが、生徒指導関係では、児童生徒の欲求・感情・行動は改善されるべきものとして批判される。

守秘性と公開性

カウンセリング関係では、対象者に関するすべての情報はカウンセラー個人の権能で守秘されるが、生徒指導関係では、学校全体の問題として学校、教育委員会などに公開される。

など、基本的な「関係基盤」が根本的に異なっていることが明らかです。こういうことを知れば、生徒指導関係が、単なる面接・相談の技術、ましてや、まったく土壌の異なるところから生まれたいわゆるカウンセリングの技術だけで持ちこたえられるものかどうか、誰にもすぐに分かることだと思います。もちろん、カウンセリングにおける面接・相談の技術が無効であるとは言ってはいません。ただ、生徒指導や学校相談は、普通の心理臨床活動とは異なり、それらの技術を含みながら、なお独自の方法論に立つて行われなければならない独立した領域であることを強調したいのです。

3 教育指導における「関係性」

生徒指導と心理臨床における基本的な関係基盤の違いを見てきました。そして、それが必然的に対象者（児童生徒・クライエント）の処遇に関して異なる技法や方法をもたらすということを述べましたが、生徒指導を含めて学校における教育指導を一般の心理臨床と異なる方法で行わせるようにするもう一つの、しかも（私が考える）最大の教師―児童生徒関係の特徴は、それ（教師―児童生徒関係）が具体的な教育・指導が始められる以前に、すでにさまざまな形で始まっているというユニークな状態（関係性）です。

一般に心理臨床活動では、臨床家とクライエントの関係は、クライエントが臨床家（または臨床機関）を訪れてから、初めて始まります。これに対して、生徒指導における教師と児童生徒の関係は、問題が起こって、そのために教師が活動を開始するときに初めて生じるのではなく、実はそれ以前に、その先生が担任（または生活主導係）を受けもった時点から始まっているのです。もっと極端に言えば、その子どもが入学して以後、（なんらかの形で）その先生を知った時点から始まっているとさえ言えます。

何故なら、ある子どもが非行を犯した、だから相談活動を始めたという時点では、先生の側からは“生徒指導関係”を開始したばかりのつもりでも、子どもの側からすれば、すでにその先生に対して、例えば、

「重箱の底をつつような、しつっこい先生」

「冷たくて、陰険」

「叱るばかりで、理解がない」

「生徒のことなんか、どうでもいい。生活指導を出世の道具にしている」

などと、かなり具体的に定着したイメージや評価を持っており、子どもはその“評価された教師”に対して反応するからです。

ですから、教師の方は、軽く第一ラウンドを始めたつもりでも、子どもの方はすでに第二あるいは第三ラウンドに入っていて、対教師作戦も決まり、防御や攻撃の方法も決まっています。

「だめじゃないか、お前、そんなことをして」

と、教師の方では軽くジャブを放ったつもりが、

「格好つけるんじゃないよ、先公だってかげじゃ何やってるか、分かりやしないくせに」と、ストレートを返され、

「まあいいさ、人間ときには間違いいもあるさ」

という息抜きのフエントが、

「そうかい、俺って、どうせだめな人間さ」

と、逃げの一手を誘ってしまふ。

こうした行き違いに、先生は、

「こんなに心配してやっているのに、どうして分かってくれないのか。口答えしては逃げるばかり。もうどうやったらいいか、分からない……」

と、いらいらし、また、嘆きもするわけです。

この場合、先生は本当に熱心です。そして、大変、親身になっています。しかし、生徒がそれを認めてくれないのでは、どうしようもありません。これは、ちょうど、心理学における「性格」の問題に似ています。ある人が自分をとて親切でやさしい人間だと思っている。しかし、その人を知っている十人が十人みなこの人を冷たくて不親切だと思っていれば、その人は、社会的には、親切でやさしい人ではなく、冷たく不親切な人としてしか存在し得ない。結局、その人の性格は「冷たくて、不親切」ということになります。そして、そういう人だということを前提に付き合いを持たれてしまいます。

先生がいかに熱心で、親身でも、そういう風な人ではないという日頃の認識があると、子ども達の心の中では、すでに勝手に作り上げたその先生の「教師像」とひそかに個人的な水面下の「関係」が結ばれています。

「警戒しなければいけない」

「この先生の指導は受けられない」

「あんなやつ言うことなんか、聞くものか（聞けるものか）」

どんなにカウンセリングの技術に長けていても、こうした背景を知ることなく通り一遍の面接や相談で“指導”しようとすれば、それはむなしい努力、というよりもむしろ、生徒にとつてはのちのちのさまざまな権威像（目上の人）との関係に障害をも与えかねない有害な行為でさえありましよう。

逆に、水面下の“関係”が好ましい先生の場合はどうでしょうか。例えば、

「やさしい先生だなあ」

「親しくなりたいな」

「がんばるところを見てもらいたいな」

「あの先生なら、叱られてもいい」

という先生です。

私も、家庭裁判所の調査官をしていた頃に同じようなことを何回も見てきましたが、以下は、かねて親しい少年係の警察官から聞いた事例です。

校内暴力こそ起こしたことはありませんが、とかく先生たちと衝突することの多いある番長（仮に、A男としておきます）が、先輩の不良グループが起こした大事件に巻き込まれて、警察に留置されました。少年係としての経験から見れば、突っ張ってはいるが意外に素直そうなので家に返したい。しかし、家庭では義理の父親との関係が悪くて誰も引き取りにきま

せん。このままでは、少年鑑別所に入れることになってしまふので、学校に連絡したところ、
“係”の先生がやってきました。先生の名前を聞いたとき、A男は眉をしかめて露骨に嫌悪
感を示しましたが、この先生はなかなか理性的で、感情的にA男を叱るようなことはせず、
また、いたずらにA男を非難するようなこともなく、きわめて穏やかにして円滑な“面接”
が進んでいったように見えました。しかし、結局最後は、

「いいよ、おれ、鑑別所でも少年院でもどこでも行くよ！」

と、A男が激昂することになってしまったのです。

このようになったのは、

「君の言うことは、よく分かる」

と、大変理解力と包容力を示していた先生が、

「おれ、早く家に帰って、学校に行きたいよ」

と、A男が言ったとき、

「その気持ちは分かるよ。でもその前に、君が学校へ行くということの意味を考えてみなく
ちやね」

と言つて、その後もひたすら引き取ってくれと迫るだけのA男に対して、それには即答し
ないで、いかにも技巧的に、手を変え品を変えて、それを考えさせようとしたからでした。
「やっぱり先生は、おれ（たち）のことなんか……」

と、すてばちになるA男に対し、先生の方は、

「答がでたら、お巡りさんに言ってくれ、すぐに来るから」と、最後まで冷静でした。

次に来たのは、大学を出てから数年の若い体育の先生でした。

「少年院でもどこでも行く」と、すっかりひねて突っ張ってしまったA男から、来てもらってもいい先生ということであろうと聞き出した、まだ担任を持ったこともないクラブ活動の先生です。先生はA男と少年係の待っている取り調べ室に招じ入れられると、まるで自分が取り調べで呼ばれたかのように、ドギマギした風情で、入口の所に立ちすくみました。しかし、寸時ぎこちなく見詰め合った後、先生はやおらA男に近寄るなり、

「バカヤロー、バカヤロー、バカヤロー」

と、怒鳴りながら、A男の頭をピシャピシャと叩き出しました。そして、そのあとも、

「こんなことになりやがって、こんなことになりやがって、こんなことになりやがって」

と、泣き声をあげながら、ひたすらA男の頭を抱き締めて叩き続けたのです。A男はただなすがままにまかせているだけでした。

その後、A男はこの先生の勧めで寮生活のできる学校へ転校し、特にクラブ活動では傑出して正式メンバーとなり、高校サッカーの全国大会に出場しました。

さて、生徒指導における指導力は、面接・相談の技術のような、いわば小手先の技術から生じるものではありません。それは、教師と児童生徒が具体的な関係を持つ以前からの潜在的な関係、さらには将来に予想される関係をも含んだすべての関係構造の中から生じる影響力の総体です。そこでは個々の場面での面接・相談的技術の持つ力はそれほど大きくはありません。A先生がどの生徒からも、よい先生、頼りになる先生と受け止められ、B先生が冷たい先生、頼りにならない先生と受け止められていれば、もはや、面接・相談の技術など問題ではなく、A先生の場合は大体いつもよい結果が得られるのに対して、B先生の場合は大体いつも悪い結果しか得られないということになるのは、初めから見えていたようなものです。

私は、教師と生徒の間に横たわる関係のあり方を「関係性」と呼んでいます。指導力とは、いわば関係性そのものです。本著で、指導力を高める、すなわち関係性を豊かに形成していくにはどうあるべきかを考えてみたいと思います。